

みんなで作る！音楽祭 in 能登

メンバー： 鈴木 淳之介（人間社会環境研究科 地域創造学専攻 M1）
 垣田 和奏・三橋 梢恵・東後 凜香・西 香楠・松井 優成（人間社会学域学校教育学類 2年）
 畑中 心音（人間社会学域学校教育学類 3年） 中川 佳映・増山くるみ・西出結香・三浦心愛（人間社会学域学校教育学類 4年）
 海野 耕輔・庄本 萌恵（人間社会環境研究科 人文学専攻 M1） 馬宇軒（人間社会環境研究科 地域創造学専攻 M2）
 浅井 暁子（人間社会研究域 学校教育系 准教授）

担当教員：人間社会研究域 学校教育系 准教授 西島 千尋



活動の様子をこちらからも！
 「金沢大学学校教育学類音楽教育ちゃんねる」

プロジェクトの概要

♪ 音楽で子どもの心の支えとなる体験を生み出す

本プロジェクトは、音楽を用いて、被災した子どもたちが友人や教職員との楽しい時間を共有し、良い思い出や心の支えとなるような体験を生み出すことを目標としている。そのために、子どもと学生の「**みんなで作る**」ことを重視した音楽祭を目指す。
 対象は能登地域の小学校であり、本学の学生が小学校へ向う音楽アウトリーチ活動を行う。音楽アウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体が主体として行う「音楽普及活動」を指す。

この目標を達成するために、単なる演奏だけでなく、子どもたちといっしょに楽しめる多様なプログラムを展開する。たとえば、使用する楽器は一度は耳にしたことのある楽器はもちろん、カホン、三味線、コントラバス、ドレミパイプなど普段あまり目にしない楽器も積極的に使用し、子どもの興味・関心を深める。さらに、演奏に加えて楽曲にちなんだクイズを実施し、主体的な聴取を図り、楽曲の魅力を分かりやすく伝える。また、ドレミパイプなどの簡単に音が鳴らせる楽器を用いた楽器体験や、馴染みのある楽曲で子どもと一緒に合唱を行い、みんなで作る音楽祭を目指す。
 これらの内容は、4月からメンバーと話し合いを重ねて作成した。活動を重ねるごとに、柔軟にプログラムを改善していき、より良い活動を追求している。

実施内容

♪ 『みんなで作る』音楽祭を目指して

at 七尾市立 東湊小学校



Point!
 視覚資料や喋り方、動作を工夫し、伝わりやすく。

5.30

at 能登町立 鶴川小学校



Point!
 最後には、全員で合唱を歌い、一体感を創出。

10.15

at 七尾市立 田鶴浜小学校



Point!
 三味線やカホンなど、多種多様な楽器で興味・関心を広げる。

6.10

at 珠洲市立 宝立小中学校



Point!
 簡単に音が鳴らせる「ドレミパイプ」で楽器体験を実施。

11.13

能登地域以外でも活動！

at 石川県立 いしかわ特別支援学校



Point!
 オペラの歌唱も披露。実施先の先生方からも好評であった。

12.11

at 能登町立 柳田小学校



Point!
 楽曲にちなんだクイズを実施。楽しみながら耳を傾ける。

10.15

プログラム例（宝立小中学校）

1.自己紹介

名前と一言「小学校の好きな遊び」

2.楽器紹介

トランペット 《君をのせて》
 カホン 《即興演奏》

3.クイズ

ピアノ連弾 《化石》
 グロッケン・トイピアノ 《金平糖の踊り》
 2重唱 《パパパの2重唱》

4.学校の楽器

リコーダー・鍵盤ハーモニカ 《トレパック》

5.楽器体験

ドレミパイプ 《聖者の行進》

6. みんなで歌おう

合唱 《ツバメ》
 《虹》

まとめ

♪ 子どもの思い出に寄与

本活動の実施後、子どもや教職員から感想をいただいた。そこには、初めて見る楽器の音に驚いたことや、クイズが楽しかったこと、そして、みんなで歌を歌って気持ち良かったなどの言葉があった。子どもたちとの歌に涙を流す先生の姿も見られ、**その場にいる全員が音楽に包まれた体験は、本活動の目的に合致していたと考えられる。**
 子どもや教職員の心に残る活動の一助となったならば幸いである。

♪ 教員を目指す学生の変容

本活動の意義として、教員養成課程に在籍する学生の音楽観の変容が挙げられる。メンバーへの聴き取りの結果、学生たちは、これまで培ってきた「演奏の巧拙」の意識だけでなく、**「子ども達にいかにして音楽の楽しさを伝え、全体で共有できるか」を重視する視座を獲得していたことが分かった。**この意識の変容は、将来の音楽教育における実践や思考の基盤を形成する上で重要であり、本活動が有意義であったと考えられる。

♪ 大学と地域の連携

本活動を通じ、能登地域や特別支援学校とのつながりを構築したことは、大学の社会的意義を考える上で一つのモデルとなりうる。地域連携が重視される昨今において、**学生と子どもが音楽を通じて双方向に恩恵を享受する本活動の意義は大きい。**
 震災復興の枠組みから、人間同士のつながりを支える取り組みとして今後も継続的に活動が続けていきたい。そのためには、活動を支える支援体制の確立が避けられない課題である。